



Q 今年の7月末に母が亡くなりました。親戚のおばさんは、「四十九日が終わらないうちに旧盆が来るから、ミーボンは来年だ」と教えてくれました。でも模合仲間の友達は、「亡くなって初めてのお盆が初盆だから、お葬式が終わってすぐの今年がミーボンだ」と教えてくれました。一体どっちが正しいのでしょうか？(宜野座村・Uさん・50代女性)

A Uさんからのご質問は、旧盆を間近に控えるこの時期、沖縄では多くの方が疑問を持たれる内容だと思えます。学問的・慣習的な見地から、一緒に考えていきたいと思います。

往生論の多様性

沖縄の旧盆に限らず、お盆は、仏式の色彩が強い年中行事ですので、仏教の学問的な見地に触れる必要があると思えます。仏教とは、『仏(ブツ・覚者)の教え』であり、『私が仏になる教え』であるという解釈があります。しかし、仏教においての「いつ、どの時期に人は仏になるのか?」「故人様は往生・成仏するのか?」の解釈は、2500年以上の歳月を経て、宗派や思想を介し諸説に分かれてきました。これを往生論の多様性といえます。

満中陰(まんちゅういん)説

往生論の多様性の中に、満中陰という一つの考え方があります。この満中陰とは、中陰(ちゆういん)の中(ちゅう)に有(ゆう)る(る)状態(じょうたい)を指(さ)す(す)こと(こと)をい(い)ふ(ふ)ので(ので)す(す)。満中陰(まんちゅういん)は、亡(な)くなった(つた)後(ご)に(に)生(な)まれる(ま)る(る)間(ま)隔(かく)の(の)時(とき)間(かん)を(を)指(さ)す(す)こと(こと)をい(い)ふ(ふ)ので(ので)す(す)。満中陰(まんちゅういん)は、亡(な)くなった(つた)後(ご)に(に)生(な)まれる(ま)る(る)間(ま)隔(かく)の(の)時(とき)間(かん)を(を)指(さ)す(す)こと(こと)をい(い)ふ(ふ)ので(ので)す(す)。

親戚のおばさんのアドバイスは、この満中陰の考え方からすれば、とても理に適っているといえます。つまり、沖縄でいう四十九日のグソーゴクラクの成仏以降が、ミーボンの対象となるということなのでしょう。

即得往生(ごくとうじやうせい)説

また、往生論の多様性の中には、即得往生という考え方もあります。この即得往生には、信心を得たときから往生が定まるとの意味があり、そこに時間的な問題が生じないという考え方があります。拡大解釈として、生前中に信心を得る者は、臨終と同時に往生するという観点から、亡くなられると同時に成仏すると受け止める考え方も生まれてきたとされます。

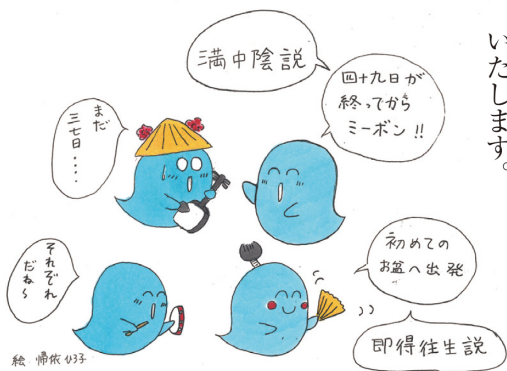
お友達のアドバイスは、

この即得往生の考え方からすれば、とても理にかなっているともいえます。つまり、臨終を葬儀・告別式のお葬式ととらえ、沖縄でいうお葬式のトータビ(トビ)唐旅(たうりょ) (文化的・思想的な源流の中国へ旅することが、往生成仏とするウチナーグチ)以降がミーボンの対象となるということなのでしょう。

沖縄のミーボンの現状

方から、ナンカの終了である四十九日が終わって来る初めての旧盆を、その故人様のミーボンとするケースが多いように見受けられます。つまり、来年がミーボンとなるということですが、これが、一般焼香のお客様に対しても、ナンカとミーボンを明確に敬い分けながらご案内するという発想にもつながるのでしよう。ナンカの途中、故人様以外のウヤファーフジがトートローメーにおられるときは、故人様の祭壇のシルイフェー(白木位牌)を一時的に倒して、ウヤファーフジの旧盆だけを簡易的にご供養するケースも、そのような判断からのしきたりなのでしょう。

さて、四十九日が終わってからのミーボンか? お葬式が終わってからのミーボンか? 来年か? 今年か? 沖縄では、その双方のしきたりが、往生論を踏まえ地域性や家庭性を超えて継承されている現状があります。ですから、Uさんのご質問の回答としては、その双方共に正式であること前提とした、ミーボンの現状という現代的な考え方を選択したいと思えます。現状としてお葬式の後は、ハチナンカという初七日を筆頭に、一週間ごとのナンカという連夜(たいや)七日(なな)日(ひ)を迎(むか)えること(こと)になります。この毎週のご供養中に、旧盆のウンケー(迎え盆)・ナカビ(中日)・ウーカイ(送り盆)をお勤めすることは、ナンカも旧盆も双方が疎かになるとの考え



今回のUさんのご相談のケースでは、ミーボンは来年になるかと思えますが、念のため、早めに喪主を中心に遺族間での相談をお勧めいたします。と同時に、焼香客の皆様方へのミーボンの時期のご案内をお願いいたします。